



	2024-6
監督: 小林正樹	
脚本: 橋本忍	
原作: 滝口康彦『異聞浪人記』	
出演: 仲代達矢 / 石浜朗 / 岩下志麻	
／三島雅夫 / 中谷一郎 / 佐藤	
藤慶 / 稲葉義男 / 井川比佐志	
／竹内亨 / 青木義朗 / 松村達雄	
／小林昭二 / 林孝一 / 五味勝雄	
／安住謙 / 富田仲次郎	
／丹波哲郎 / 三國連太郎	

みどころ

1962 (昭和 37) 年公開の本作は、3 本立て 55 円の映画館に通っていた私には高嶺の花だった。それを今、「橋本忍映画祭 2024」で初鑑賞！“近頃、江戸で流行るもの”とは？「切腹」は痛いに決まっているが、それを「竹光でやれ」と言われると・・・。

本作は、井伊家江戸屋敷前で“切腹の押し売り”をする若侍が登場するところから始まるが、その対応は如何に？その展開も面白いが、それ以上に橋本忍脚本の妙が、仲代達矢の絶妙の演技による嘘も方便の“介錯人の指名”や“身の上話”の中で展開していくので、それに注目！こりゃ面白い！

この男、ホントに切腹するの？この男の狙いは一体ナニ？やっとそれを悟った井伊家家老が下す処置とは？そして、“報道管制”を含む、一連の事件処置のフェイク性から明らかになる、サムライ精神の虚しさとは？

昔の邦画にこんな名作があったことを再確認！

■昭和 37 年公開！日活ばかりの私には本作はとても！■

昭和 37 年 9 月に公開された本作は、1962 年のキネマ旬報ベストテンの第 3 位となり、主演した仲代達矢は主演男優を受賞した。また、本作は 1963 年の第 16 回カンヌ国際映画祭で審査員特別賞を受賞した。しかし、昭和 37 年 4 月に中学 2 年生になったばかりの私は、土日祝日ごとに 3 本立て 55 円の少し古い日活青春映画と、かなり古い洋画の名作ばかり観ていたから、橋本忍脚本、小林正樹監督の新作時代劇には縁がなかった。橋本忍脚本の素晴らしさを知ったのは、ずっと後に『砂の器』(74 年) (『シネマ 43』343 頁) や『八甲田山』(77 年) を観た時だ。

他方、仲代達矢といえば、黒澤明作品で三船敏郎の対抗馬として鮮烈な印象を残した『用

心棒』(61年)や主演作『乱』(85年)が強く印象に残っているが、『切腹』は公開時も、その後のTV放映でも観ていなかった。したがって、シネ・ヌーヴォが開催した「生誕百五年・没後五年 橋本忍映画祭 2024」で、『切腹』を『八甲田山』に続けて観られると知り、勇んで映画館へ。『八甲田山』は既に満席で、補助席のパイプ椅子にしか座れなかったが、本作は満席直前で何とかセーフ。

去る11月25日に観た北野武監督の『首』(23年)は、北野監督流の美学を貫いた作品だったが、その出来はイマイチ。それに比べると、1962年公開の本作は白黒映画ながら、冒頭からその美学はピカイチだ。冒頭に映るのは、2023年のNHK大河ドラマ『どうする家康』でも有名になった「井伊家」の江戸屋敷。時は1630年(寛永7年)だ。そこを安芸広島福島家元家臣、津雲半四郎(仲代達矢)と名乗る老浪人が訪れてきたが、彼の用件は一体ナニ？

■□近頃、江戸で流行るもの！それは切腹の押し売り！■□

本作は滝口康彦の小説『異聞浪人記』を元に橋本忍が脚本を書いたものだが、中学2年生の時の私が本作を観ても、多分本作で橋本が訴えたかった、井伊家に伝えられている侍精神へのアンチテーゼは理解できなかっただろう。作家・三島由紀夫が1970年11月25日に陸上自衛隊市谷駐屯地で割腹自殺をした事件は、私が学生運動に没頭していた時期で、彼の行為はさまざまな議論を呼んだが、本作が三島の精神に何らかの影響を与えていたであろうことは間違いない。また、彼の1966年公開の自主製作映画『憂国』(65年)(『シネマ10』304頁)の製作動機に影響を与えたことは、本作のウィキペディアにも明記されている。

大阪冬の陣(1614年)、夏の陣(1615年)において、真田幸村、後藤又兵衛等々の浪人たちが次々と大阪城に駆けつけたことはよく知られているが、これは働き場所のない浪人たちを豊臣秀頼と淀君がカネでかき集めたものだ。しかし、豊臣の天下が終わり、徳川の時代が始まり、「どうする家康」で理想の社会として描かれていた、争いのない世が登場すると・・・？

本作冒頭、井伊家の江戸屋敷の前に現れた津雲半四郎は安芸広島福島家元家臣と名乗ったが、この福島家とは福島正則のことだ。福島正則は加藤清正や黒田長政らと共に豊臣秀吉傘下の家臣でありながら、石田三成への反感等もあって、1600年の関ヶ原の戦いでは徳川方についた上、大阪冬の陣、夏の陣でも家康の下で豊臣家の滅亡に力を尽くしたが、徳川幕府が安定の時代に入ってくると・・・？まずはそこら辺りを前提知識として理解した上で、津雲半四郎の「切腹のために、玄関先を借りたい」との申し出の意味をしっかりと考えたい。近頃江戸で流行るのは「切腹の押し売り」らしい。しかし、それって一体ナニ？

■□仲代をはじめ、三國も丹波も石濱も岩下もみんな若い！■□

ウィキペディアによると、公開時の本作の惹句は、「豪剣うなる八相くずし！ 嵐よぶ三つの決闘！」だったらしい。これは、宮本武蔵×佐々木小次郎の巖流島の決闘と同じよう

な“剣の対決”に注目したもののだが、本作の本当の見どころは、それ以上に、かつて日本人が尊重していたサムライ精神へのアンチテーゼにある。

井伊家は徳川譜代の家臣（大名）の中でもトップを争う“武闘派”だから、平和な世に入った1630年においても、サムライ精神にこだわっていたらしい。本作で徹底してその立場に立つのが、井伊家家老の斎藤勘解由（三國連太郎）と馬廻り役の沢潟彦九郎（丹波哲郎）だ。当時江戸で流行っていた「切腹の押し売り」を嫌っていたこの2人は、千々岩求女（石濱朗）の申し出が、かつて仙石家で起きた「切腹の押し売り」と同じと考えたうえ、結論として彼の申し出通り、切腹させてやろうという方針をとることに。しかも、この2人は、妻・美保（岩下志麻）と幼い子供を養うために、大小2本の刀さえ質に入れ、竹光しか持っていない千々岩求女に対して、その竹光での切腹を命じたからすごい。

しかして、なぜか今、井伊家江戸屋敷の前に現れ、千々岩求女と全く同じ口上を述べた津雲半四郎に対して、家老の斎藤は千々岩求女の事件を聞かせることによって退散させようと考え、詳細を説明することに。ところが、それを聞いた津雲半四郎は、斎藤の考え通り、怖くなって退散するどころか、逆に・・・。

元旦に能登半島地震が発生した今年は2024年だから、本作が公開された1963年は約60年前。それを考えれば、仲代達矢はもとより、今は亡き三國連太郎や丹波哲郎が若いのも当然だ。また、若き日の石濱朗が美男の若者で、岩下志麻に“極道の妻”の貫禄はなく、可憐な娘役がピッタリなのも当然だ。しかし、本作前半で彼らが見せるセリフ劇の見事さは秀逸。1960年代の日本がこんな素晴らしい映画を作っていたことに感嘆！

■□■ウソも方便！介錯人の指名権は誰に？■□■

俳優・仲代達矢は、『PERFECT DAYS』（23年）で第76回カンヌ国際映画祭の主演男優賞を受賞した俳優、役所広司の師匠で、無名塾を主催している名優だから、その演技力はピカイチ。したがって、「千々岩求女の話を知ってるか？」と聞かれた津雲半四郎が「知らない」と答える姿はごく自然で、そこに嘘があるとは思えない。また、その話を聞いてもなお平然と切腹の意思を変えない津雲半四郎を見て、斎藤が「この男は間違いない」と信用したのは当然だ。その結果、屋敷の前ではなく、中庭で津雲半四郎の切腹がとり行われることになったが、斎藤が指名した介錯人に津雲半四郎が異議を唱え、剣の使い手として有名な沢潟彦九郎を介錯人として指名したところから、次の面白い展開になっていく。

私の考えでは、切腹の介錯人の指名権はあくまで井伊家にあり、津雲半四郎にあるとは思えない。もちろん、本来の制度がどうなっているのか私は知らないが、それを知らなくても、津雲半四郎の弁論術とその論法は明確で鋭いから、斎藤がその論法に引きずられていったのも当然だ。そして、沢潟彦九郎が病気のため出仕していないと聞いた斎藤は、急ぎ使いを派遣して沢潟彦九郎を呼び寄せることに。なるほど、津雲半四郎が津雲半四郎なら、斎藤勘解由も斎藤勘解由だ。もっとも、沢潟彦九郎にとっては急な呼び出しだから、いくらご家老から「火急の用」だと言われても、直ちに仕出し、介錯人の仕事に就くこと

ができるの？他方、沢潟彦九郎が駆けつけてくるまでの間、当の津雲半四郎をはじめ、斎藤勘解由他、多くの家臣たちが見守る“切腹会場”の設営はどうするの？

■橋本忍脚本の妙をタップリと！待つ間、身の上話でも！■

私は野村芳太郎監督、橋本忍・山田洋次脚本、丹波哲郎主演の『砂の器』(74年)を歴代邦画、断トツのNo.1に挙げている。そこでは、橋本忍脚本の素晴らしさが、主人公が作曲した「宿命」というピアノ協奏曲の素晴らしさと相まって際立っていた。

本作では、沢潟彦九郎への使いが戻り、沢潟彦九郎が介錯人として駆けつけてくるまでの間、切腹会場にもたらされたしばしの時間をどうつなぐか(時間つぶしするか)が問題だ。その主導権は本来、斎藤勘解由にあるはずだが、本作ではここで津雲半四郎が「使いが戻ってくるまでの間、私の身の上話でも聞いて時間つぶしをされては如何？」と提案し、斎藤勘解由がそれに乗ることに。さあ、そこで津雲半四郎はどんな“身の上話”をするの？これは偶然の産物？それとも、計算ずくでの津雲半四郎の作戦？

そのことは、戻ってきた使いから、沢潟彦九郎が病気で寝込んでおり、お役に立てないとの報告を聞き、津雲半四郎が「それなら第2の候補〇〇を、第3の候補△△を」と指名していく中で、少しずつ明らかになっていく。そして、何と津雲半四郎が指名した第2の候補も、第3の候補も両者とも病欠中だと言われると、アレレ、アレレ。こりゃ一体ナニ？そこには、何らかのいわく因縁があること明らかだ。そんな展開の中、観客たちはみな本作に見る橋本忍脚本の素晴らしい妙をタップリ味わうことに。

■“嵐よぶ三つの決闘”とは？話がここまで進むと？■

津雲半四郎が介錯人として指名した井伊家の剣の使い手3人が、3人とも揃って病欠で出仕していない？そんなバカな！津雲半四郎の身の上話を聞きながら、鷹揚に(上から目線で？)対応していた家老の斎藤も、話がここまで進むと、コトの異常さに気が付かざるを得なかった。

映画とは便利な芸術で、津雲半四郎の口から語られたであろう三つの決闘については、言葉ではなく、スクリーン上でリアルに“三つの決闘”ぶりを見せてくれるので、それに注目！そこで津雲半四郎が狙ったのは、彼ら3人の命ではなく、あくまで「武士の命」とも言うべき鬘。相当な剣の使い手である津雲半四郎は、最初の2人についてはそれなりにすんなりと成功したものの、井伊家No.1の剣の達人である沢潟彦九郎の鬘を切り取るについては、殺す以上に苦労したらしい。もちろん沢潟彦九郎役を演じる丹波哲郎にしても、負けることは脚本上仕方ないとしても、カッコよく負けなければならないから、その演出は大変だ。

また、民事裁判手続きでは原・被告双方の主張を聞いた合議体の裁判所を構成する3人の裁判官が、処理方針を決めるための「合議」をするべく、しばらく退廷することがあるが、本作でも、それと同じように、庭先のむしろの上に座った津雲半四郎の身の上話を長々と聞かされた挙句、その何らかの企みを悟った斎藤は、「しばし待て！」と宣言し、屋敷内

の一室で“合議”をすることに。そして合議の結論（津雲半四郎の結論？）は、今や津雲半四郎は井伊藩が千々岩求女に対してなした竹光による切腹の処置に対して異議を唱えるためにやってきているという認識の下に「津雲半四郎を斬り捨てろ！」ということに。

■□■クライマックスは如何に？その美学をしっかりと！■□■

私は年末年始にかけて BS12 で TV 放映された高倉健主演の『昭和残侠伝』シリーズ全 9 作を録画して、すべて鑑賞した。菅原文太らが主演した、しばらく後の「実録路線」ヤクザ映画では、血で血を洗うヤクザ抗争が生臭く描かれたが、『昭和残侠伝』シリーズは任侠映画の“美学の定番”どおりにストーリーが展開していくのが特徴だ。そのため、最後に単身もしくは盟友と共に、ドス（白刃）を持って殴り込みをかける高倉健は、背中の唐獅子牡丹を見せながら大奮闘。ピストルで撃たれてもそれは急所を外れ、刀傷は負ってもそれは致命傷にならず、最後の最後には“悪の権化”にとどめを刺し、潔く当局（警察）のお縄につくことに。そうだからこそ、同シリーズはラストに拍手喝采を浴びると共に、次作の企画も生まれるわけだ。

しかし、もともとシリーズ化など頭がない本作が迎えるラストは、斎藤から「斬れ！」と命じられた井伊家の家臣たちが一斉に津雲半四郎に対して斬りかかってきたから、さあ大変。これでは、いくら津雲半四郎の腕が立つと言っても、殺されるのはもうすぐだ。私はそう思っていたが、クライマックスにおける津雲半四郎の奮闘ぶりは凄まじいから、その殺陣の美学にも注目。しかし、鉄砲まで持ち出されてくると、万事休す！その結果は“想定どおり”だから、その美学はあなた自身の目でしっかりと。

■□■サムライ精神の虚しさは？“報道管制”は昔も同じ！？■□■

昨年の NHK 大河ドラマ『どうする家康』では、井伊家は一貫して家康を支え続ける、徳川随一の猛将というイメージを貫いていた。しかし、サムライ精神の虚しさを描こうとした小林正樹監督による本作のラストは、井伊家家老たる斎藤勘解由の最優先事項は井伊家という組織の維持であったことを明らかに示す処置が明らかにされるので、それに注目！その処置は、病欠の 3 名のうち、沢瀉彦九郎は自主的に切腹して果て、他の 2 人は斎藤勘解由によって拝死を受け、帰り討ちによる傷者は手厚い治療を受けるというものだ。ちなみに、「橋本忍映画祭 2024」で 1 月 11 日に観た『ハワイ・ミッドウェイ大海空戦 太平洋の嵐』（60 年）では、松林監督の演出によるラストは、大本営がミッドウェイ海戦の敗北を認めず、フェイクニュースを流して“報道管制”をしていたが、本作もそれと同じだ。つまり、斎藤の幕府への報告は、「津雲半四郎は見事切腹した」とし、「死者はすべて病死」としたものだ。このことは井伊家に代々伝わっている古文書（日記）の中に書かれているそうだが、常に歴史は勝者の目で書かれたものであることを、改めて自覚する必要がある。

2024（令和 6）年 1 月 17 日記